「親子のためのネット社会の歩き方セミナー」

― 子どもの携帯電話の利用実態と保護者の対応の仕方 ―

三木市立教育センター　所長　梶本　佳照
me730457@ns.miki.ed.jp

キーワード：情報モラル、携帯電話、ケータイ、ネットワーク外部性、利用実態、保護者

１．はじめに

子どもの携帯電話の利用について、悪い点がいろいろ論議されているが、その論議にかかわらず、いまや社会生活になくてはならないものになっていることは事実である。子どもにとっては、携帯電話は単に電話をするための機器ではなく、メール、カメラ、ゲーム、インターネット等いろいろな機能を利用することができる電子端末であり、その意味合いも含んで子どもたちはケータイと呼んでいる。ケータイを子どもが必要とする大きな要因はなにかを 2008 年に行われた調査からそれを探るとともに、保護者が子どもにケータイ持たせる理由と子どもが持ちたいと思う理由の差を明らかにする。また、ケータイの使い方について子どもは誰から学んでいるのかについても調査結果から明らかかにし、ケータイやインターネットを安全に上手に使う力を子どもがつけるにあたって保護者の役割を考えていきたい。

２．子どものケータイ使用の実態

２００８年にモバイル社会研究所と GSMA が共同で行った子どものケータイ・コミュニケーション環境に関する国際比較調査結果から見ていくことにする。

ケータイを持たせる理由及び持つ理由については、日本だけの調査結果である。

調査日　２００８年６月から９月

調査対象　日本（９～１８歳）、韓国（１２～１８歳）、中国（１０～１８歳）、インド（１０～１８歳）、メキシコ（１０～１８歳）の５カ国の子どもおよび保護者　それぞれ１,０００人から２,０００人　合計約６,０００人

２．１ 年齢別ケータイ保有率

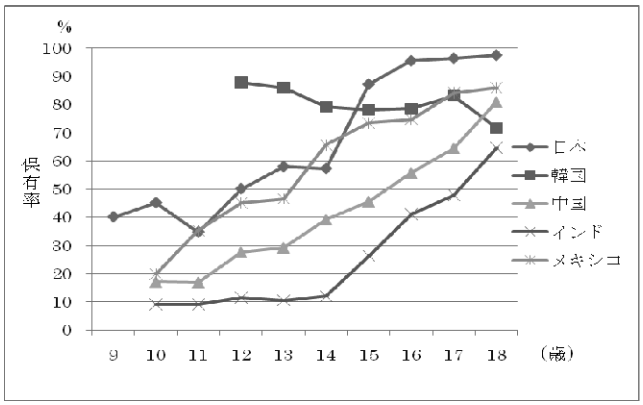

図１　年齢別ケータイ保有率

年齢別のケータイ保有率のグラフ（図１）を見ると、韓国については、すでに１２歳で子どものケータイ保有率が、８割を超えていてそれ以降の増加は横ばいである。他の国ではケータイの保有率は年齢が上がるにつれて増加している。日本での増え方の特長を見ると１４歳から１５歳になるときに急に増加している。この時期は、高校への入学時期と一致しており、高校へ入学するとともにケータイを持つ子どもが増えることが考えられる。１１歳から１２歳の中学校への入学時期についても上昇がみられる。メキシコや中国は、一律に増えている。インドは、１５歳から急に増えはじめる。

２．２ ケータイの普及要因

ケータイの普及要因について、調査結果によると**ネットワーク外部性**が大きな要因になっていることがわかる。ネットワーク外部性とは、周囲にその製品の利用者が増えると、自分にとっての効用も増加する性質をいう。これが働くと、その製品の普及が加速度的に働く。例えば、ファクシミリを自分しか所有していなければ、ファクシミリとして使うことができない。しかし、周りにファクシミリを所有する人が増えるとお互いにファクシミリを使って連絡をすることができるので、利便性が増える。

調査方法としては、仲の良い友だち３人をあげてもらい、その中でケータイを保有する人数を測定する。友だちの中で保有する人が増えれば増えるほど、ケータイを保有するあるいは保有したくなるという効果が確認されればネットワーク外部性が働いていることになる。

結果の詳細を見ると、３人の友だちのうち１人がケータイを保有すると、２４％の子どもが自分も保有し、非保有者では１３％が保有したいと思うようになっている。国別に見ると最も大きいのは中国(４４％)で、日本とメキシコが同程度、インド(１０％)が最も弱くなっている。

次に、ケータイ保有率と相関関係が見られたのは、**子どもの年齢、性別、保護者の所得、テレビゲームとパソコン所有**であった。年齢は、１歳年をとるごとに日本では４％、中国では６％、メキシコでは８％の子どもがケータイを保有するようになっている。性別では、ほとんどの国で男子より女子の方が保有率が４％高い。保護者の所得は、全

体として有意がある。テレビゲームについては、テレビゲームを保有している子どもは、ケータイの保有率も高くケータイの保有開始年齢も低い。また、パソコンを保有している子どもは、ケータイも保有している傾向がある。

２．３ 保護者がケータイを持たせる理由と子どもが持つ理由

保護者が子どもにケータイを持たせる理由と子どもが持つ理由について質問をした結果(表１)を比較すると、違いが大きいの点は､保護者は､｢子どもに対していつでも連絡とれる｣ためのケータイを持たせている理由が最も多いが、子どもは「友人がケータイを持ち始めた」が最も多い。保護者が考える理由で友だちに関連する内容は、５番目である。一方、理由で一致しているのは、「緊急連絡のため」である。これらのことから、保護者は、緊急時の連絡用にケータイを子どもに持たせているが、子どもは、緊急時の連絡もあるが、友だちと連絡しあうためにケータイを持ちたいと考えていることがわかる。２００８年度の文部科学省の調査結果によるメールの利用率（図２）とも合わせて考えると子どもは友だちとの連絡にメールを多く使っているようである。

表１　保護者がケータイを持たせる理由と子どもが持つ理由

	保護者がケータイを持たせる理由	%		初めてケータイを保有したときの欲しかった理由	%
1	子どもに対していつでも連絡がとれるように	75	1	友人がケータイを持ち始めたから	44
2	子どもからいつでも連絡ができるように	62	2	緊急時や外出中の問題発生時の連絡のため	43
3	トラブルや災害時等の緊急連絡のため	48	3	夜遅く帰宅するときの連絡手段として	26
4	子どもが欲しがったから	34	4	進学・進級などのお祝い・ご褒美	23
5	周りの子どもたちが持っているから	24	5	利用したいサービスがあったから	18

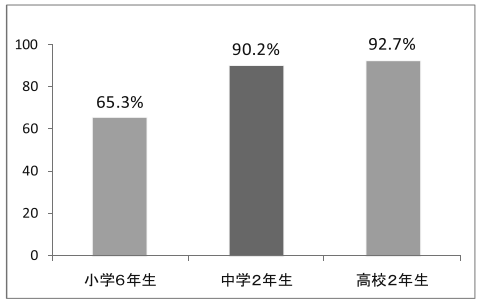

図２　メールの利用率

３．ケータイの使い方についての保護者の役割

ケータイの使い方について、子どもは誰から学んでいるのか見ていくと、１番が家庭から、２番が学校の先生や友人から、３番が携帯電話事業者や行政機関になっている（図３）

以上のことから、保護者にケータイやインターネットの安全で上手な使い方を知ってもらうことが大切であることがわかる。

また、子どもが困った時に、一番身近にいるのが保護者であることから、子どもが相談しやすい雰囲気を作っておくことが大切である。

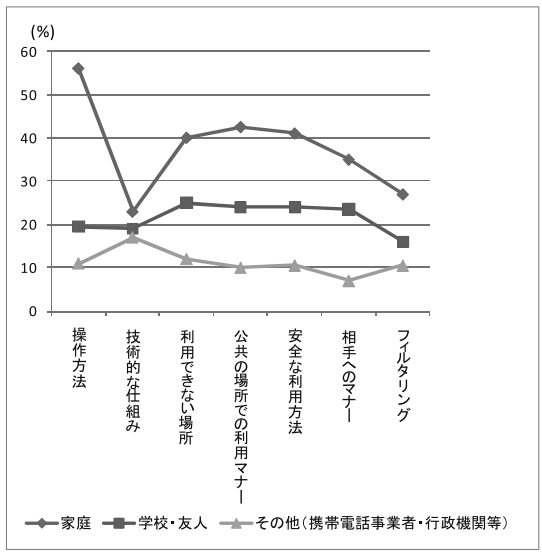

図３　ケータイについて誰から学ぶか

４．親子のためのネット社会の歩き方セミナーの意義

親子のためのネット社会の歩き方セミナーは、子どもに情報モラルの具体的な事例を挙げながら考えさせる授業を行った後、保護者に対して、もう少し詳しく子どものケータイやインターネットの使用実態を説明する。そして、ケータイの使い方について家庭でのルール作りの大切さや子どもがケータイやインターネットを使っていて困った時に、相談しやすい雰囲気を作っておくことがポイントであるということを理解してもらう。家庭でのルール作りは、ルールを相談する中で、保護者と子どもがケータイ等の使い方について話すことに意味がある。

子どものケータイの使っている経験には、差があるのでセミナーの中では、取り上げている事例がどういう状況なのか共通に理解させることが大切である。また、ルールづくりについて子どもに自分たちならどういうルールを作るのか考えさせる作業を取り入れたこともあったが、子どもが受け身ではなく主体的に考えようとしていた。ルールを考えるには、ケータイの使い方についていろいろな場面を考えることになるので、総合的にケータイの使い方を考える上で有効であった。

図４　セミナーテキスト保護者版より

【参考文献】

（１）モバイル社会研究所著　世界の子どもとケータイ・コミュニケーション　５カ国比較調査、NTT 出版、2009 年 12 月